

〔コラム〕 石見神楽の代表的演目

大蛇 〔おろち〕

記紀神話であるスサノオノミコトのヤマタノオロチ退治を物語る石見神楽演目である。

押しも押されもしない石見神楽を代表する演目で、石見神楽の代名詞といっても過言ではない。

石見神楽面（長浜面）の製作技術の最高峰の造形である「蛇頭」と提灯にヒントを得て創りあげられた「石見神楽蛇胴」を駆使し、リアリティ溢れるダイナミックな大蛇（オロチ）の動きは観る者を圧倒し、須佐之男命（スサノオノミコト）が剣を振りかざし対決するシーンでは「石見神楽花火」を大蛇が口から吹き放ち、言葉では言い表せない豪快な舞が目の前で繰り広げられる。



鐘馗 〔しょうき〕

中国の民間伝承、病に伏した唐の玄宗皇帝の夢物語りを石見神楽に取り入れた演目である。

中国の病魔退散の物語りである民間伝承に登場する「鐘馗」と、日本に伝わる病魔退散の「茅の輪」の説話に登場する「スサノオ」を重ね合わせ、石見神楽では鐘馗＝スサノオとして舞の構成をされてきたが、「改正神楽」では復古神道の観点から、中国の道教系の神と日本古来の神との同化を嫌い、演目「鐘馗」での鐘馗とスサノオの重ねあわせを是正した。

人々の生活で大きな恐れであった「病い」を題材とし、鐘馗が病魔の鬼、疫神を退治する病魔退散の演目「鐘馗」は浜田地域では、神職が舞を奉納していた古来より大切にされ、役付き舞として、鐘馗、疫神とも手練れの舞い手が贅を尽くした豪華絢爛な衣裳を纏い、威風堂々と重厚に舞いあげる。



恵比須 〔えびす〕

出雲大社の御祭神、大国主命（オホクニヌシノミコト）の御子神であり島根半島の東端、美保神社の御祭神、事代主命（コトシロヌシノミコト）は福の神、恵比須大神（エビスノオオカミ）「えびっさん」として有名である。この神は釣りを好み、美保の御崎に立って釣りをするさまをコミカルに微笑ましく舞う演目である。

漁の神としても崇められる神の舞である「恵比須」は、港町浜田では大切に舞継がれている。最近では、舞の内容が短縮され恵比須の舞のみで舞われることも多いが、旅人である「大人」という役割の舞い手が、美保神社の宮人より神社縁起と恵比須大神のご神徳を仰ぎ授かる場面がこの演目の持つ大切な教えである。



文＝小川 徹



石見神楽を
創り出したまち浜田

島根県浜田市

石見神楽

HEROES

～文化と情熱を受け継ぐ者たち～



文化庁

令和4年度文化庁文化芸術振興費補助金（地域文化財総合活用推進事業）



神々や鬼たちが躍動する神話の世界
石見地域で伝承される神楽

一般社団法人 浜田市観光協会 〒697-0022 島根県浜田市浅井町777-35(JR浜田駅2階) tel.0855-24-1085 fax.0855-24-1081

浜田市産業経済部 観光交流課 〒697-8501 島根県浜田市殿町1番地 tel. 0855-25-9531 fax.0855-23-4040

石見神楽公式サイト

定期イベント・大会スケジュールなどの情報はコチラから
<https://iwamikagura.jp/>

石見神楽

検索



歴史と背景

石見神楽の

山陰地方とも呼ばれ、中国山地を境に日本海側沿岸西部に位置する島根県は、かつては「隠岐国」「出雲国」「石見国」にわかれていました。海や川、そして里山——。そこには豊かで様々な文化があり、いまでも残されています。

その島根県西部・石見地域は、中国山地の深い山々が海岸近くまで迫り、海の幸をもたらす日本海は、季節や天候によって怒涛逆巻き黒々とした波が打ち寄せますが、穏やかなコバルトブルーの水平線がとても美しく見渡せます。

そんな山陰の、山と海とに育まれた石見地域には「石見神楽」という民俗芸能があります。

石見神楽は、重厚さと軽快さを併せ持つ独特の奏楽と舞、それを彩る豪華絢爛な衣裳や面、蛇胴を駆使した躍動感溢れる舞いで、観る人を神話の世界に誘い魅了します。

とくに石見の中央に位置し、港町と城下町とで栄えた浜田市は、現在でも手漉きで作られる、ユネスコ無形文化遺産、国指定重要無形文化財の「石州半紙」や「石州和紙」をもちいた「石見神楽面（長浜面）」「石見神楽蛇胴」「石見神楽衣裳」「石見神楽花火」などの伝統的なものづくりが生まれ発展してきたまちです。いまやこれらの伝統的なものづくりは、「石見神楽」において欠くことのできない文化として根付いています。

石見神楽は、江戸時代には既に神職によって舞われていました。石見地域で信仰されている大元神のための式年祭（決められた期間ごとに行なわれる祭祀）で舞われたものが起源だと考えられます。この大元神の式年祭で神職が舞っていた神楽が、現在の石見神楽の「儀式舞」「能舞（神楽能）」の基となり、いつしか様々な神社の祭で舞われるようになり、地域にとってなくてはならない文化として根付いていきました。

特に、浜田の神職は、その舞をどの地域よりも早く、毎年例祭や祈願祭で舞っていました。

時は明治、明治政府の方針により神職たちは今まで通り祭や神楽をおこなうことが難しくなりました。そのため、神職は地域の人びとへ神楽を教え、現在の「石見神楽」が誕生することになりました。

しかし、師匠から弟子へ口伝で教わる過程で、段々と舞や詞章が崩れたり、分からなくなったりしていきます。それを残念に思った浜田の国学者・藤井宗雄や、神職の牛尾弘篤らは、明治初期に、記紀神話や神道の考えに基づいて、詞章を台本にして整えたり、舞や奏楽を整えたりしようとしました。このとき整えられた教導を理解し大きく影響を受けた神楽を、いまは石見神楽「八調子」と呼び、あまり影響を受けなかった神楽を石見神楽「六調子」として区別しています。

石見神楽の大きな特徴は、伝統を大事にしながらも、時代とともに変化することも受容し、地域ごと、団体ごとにある個性をもつところです。神社での奉納神楽を大事にして、伝統を大切に舞や文化を継承するだけではなく、神楽大会や様々なイベント、コラボ企画などにも出かけていくこともまた、石見神楽ならではのいえいでしょう。

1970年の日本万国博覧会（大阪万博）では、「石見神楽・大蛇退治」としてはじめて13頭もの大蛇を登場させ、観客を驚かせました。これ以降、日本を代表する民俗芸能として知られることとなり、国内外での神楽公演も数多くおこなわれています。

2019年には、石見神楽が日本遺産「神々や鬼たちが躍動する神話の世界～石見地域で伝承される神楽～」の構成文化財のひとつに認定されました。

2022年には、浜田市の自主公演として、伝統芸能の殿堂・国立劇場で石見神楽公演をおこないました。このときには、50頭もの大蛇をくり出し、浜田の石見神楽の魅力を発信しました。これからは、浜田市を中心に花開いた石見神楽文化は、伝統の継承と新たな取組みに挑戦し続けることでしょう。



奉納神楽



石見神楽国立劇場公演



石見神楽を 創り出したまち 浜田

浜田の神職は、石見地域の神職のなかでも、神楽に対する熱意が強く、継承活動と発展のために情熱を燃やしました。それは、「詞章、舞、奏楽の整え」「神楽に使用する用具の整え」などからみて感じることができます。その心意気は地域の人びとにも受け継がれ、明治から昭和の20年代までのあいだに「石見神楽面（長浜面）」「石見神楽蛇胴」「石見神楽衣裳」「石見神楽笛」「石見神楽花火」などの伝統的なものづくりが生まれ発展し、「改正神楽（八調子神楽）」「校定石見神楽台本」などの石見神楽の文化が花開き、浜田周辺のみならず様々な地域へと影響を与え、中国山地を越え広



石見神楽面



石見神楽衣裳



石見神楽蛇胴

浜田で受け継がれる石見神楽

石見神楽とその文化は中国地方を中心に様々な地域に伝播の広がりを見せました。現在、島根県石見地域には130を超える神楽団体がありますが、その中の50以上の団体が浜田市に存在し、まさに石見神楽の聖地としての継承がなされています。

その担い手は、そこに暮らす住民であり、就学前の子どもから70歳、80歳代の重鎮までがその継承活動に関わり、それぞれ学業や仕事、生活を送りながら日々の練習に励み、奉納や公演を通して地域の大切な宝である石見神楽の継承と発展のために力を注いでいます。

地域の暮らしに溶け込んだ石見神楽は、その公演の場所を神社での奉納神楽にとどめず、様々な催しやイベント、定期公演、神楽大会さらには結婚披露宴の席でも舞われるなど、市民の生活に深く溶け込んでいます。



このように生活に密着した石見神楽は子どもたちの憧れの的であり、誇りと情熱を持って舞う姿はまさにヒーロー。そして、幼い頃から「神楽あそび」をはじめのが浜田の子どもの特徴で、その姿は家庭や保育園、幼稚園、小学校など生活の多くのシーンで見られます。その結果、本格的に石見神楽をこころざす子どもも多く、子ども神楽団体の結成や、神楽団体への加入にもつながり後継者の育成を通して連綿と石見神楽は継承されていくのです。

それぞれの地域で子ども神楽団体の結成や神楽団体への加入が起こることで、それを支援する動きも高まり、サポート団体や企業が企画する子ども神楽大会も開催されています。また、市内の高校には部活動で石見神楽に取り組む高校もあり、多くの若者が石見神楽に関わることを理由に地元浜田に残ることを決断し、若者の定住にも大きな役割も果たしています。



子どもたちが日頃の練習の成果を披露する、子ども神楽大会。堂々と舞う姿は頼もしく、先人達から続く情熱は次世代へ受け継がれています。

コラム 石見神楽「六調子」と「八調子」

石見神楽の伝承地域では、便宜的に「六調子」「八調子」と区別してよぶことがあるが、石見神楽として大きな違いがあるわけではない。

一般に八調子といわれるものは、明治中期(明治17年頃)浜田の国学者・藤井宗雄や神職・牛尾弘篤らによって整えられた「改正神楽」の教えの影響を受けている。神職から地域の人々へと神楽の担い手が移る過程で、品位を欠いたり卑俗化したりすることを危惧し、復古神道の観点から「舞振り」「詞章」「奏楽」などを整え指導した。このとき整えられた詞章は「神楽の声」という台本にまとめられ、これが浜田を中心に大きな影響を与えた。また、改正の過程で、新たな奏楽パターンも付け足された。この一連の教導の舞を「改正神楽」と呼ぶ。改正神楽という新たに舞を刷新したと思ってしまうが、それは間違いであり、新しく作られたものではなく、近世以前の浜田の神職神楽の流れを汲みながら、国学者や神職によって「是正」「改正」された芸態なのである。

改正神楽とは先にも述べるとおり、舞振り、詞章、奏楽などを神道思想の観点から洗練させ品格と厚みをもたらせたものであり、改正神楽の中には旧来の舞振り、詞章、奏楽も存在する。この改正神楽を神職ら(原井組神職神楽)から直接指導を受けた現在の「石見神楽長浜社中」「日脚神代神楽社中」「井野神楽」などの団体により石見地域の沿岸部を中心に伝播した。

この改正神楽の影響を大きく受けたものを現在では「八調子」と呼び、あまり影響を受けていないものを「六調子」と呼んでいる。

六調子は古く、八調子は新しいとか、六調子の舞や奏楽は緩やかで、八調子の舞や奏楽は速いという解釈では短絡的で正しくない考え方である。

文＝小川 徹



石見神楽を支える 伝統のものづくりと文化

石見神楽を語る上で欠かすことができないのは、浜田に創始された石見神楽の伝統のものづくりと文化です。また、石見神楽のものづくりに欠かせないのは、浜田で生産される「石州和紙」です。この和紙なくしては石見神楽のものづくりは発展しなかったといっても過言ではありません。

浜田の職人たちの感性と知恵や努力、技術によって創りあげられた用具は石見神楽が石見神楽として認められる大きな役割を果たし、これら石見神楽のものづくりと文化が存在するからこそ「石見神楽を創り出したまち浜田」といえるのです。石見神楽を観賞する際はその舞もさることながら、浜田が誇る石見神楽の伝統のものづくりの職人や文化の息吹も感じていただきたいです。

◆ 石州和紙

この地域において1300年もの間、ここに住む職人の手により紙すき技術を継承されてきた「石州和紙」はその微細で強靱な紙質が特徴で、経済産業大臣指定の伝統的工芸品です。また、その製品である「石州半紙」はユネスコの無形文化遺産、国の重要無形文化財にも指定されています。

石見神楽においては、石見神楽の伝統のものづくりである「石見神楽面（長浜面）」「石見神楽蛇胴」「石見神楽衣裳」「石見神楽花火」などの材料として欠くことのできないものです。



◆ 石見神楽蛇胴

植田蛇胴製作所の三代目植田晃司（倫吉）の祖父・植田菊市が、長浜地域のものづくりの一つであった提灯から着想を得て明治後期に開発したのが始まりです。神職神楽の時代から明治初期頃までは、鱗紋を描いた衣裳を着た一人舞でしたが、初代植田晃司（菊市）が石見神楽長浜社中で蛇胴を使った二人舞を考案し、大蛇の舞に迫力とリアリティーをもたらしました。

竹と石州和紙によりつくられるその蛇胴による石見神楽の「大蛇」は、今や石見神楽の代名詞となり、創始地である浜田の舞手により継がれた多頭立ての大蛇の舞技術は瞬く間に、中国、九州地方の神楽や歌舞伎、文楽、組踊など国や

県の指定を受ける伝統芸能に取り入れられ、現在では様々なエンターテインメントシーンにまで波及しています。

2023年7月、植田蛇胴製作所の植田晃司による「石見神楽蛇胴」の製作技術は浜田市の無形文化財に指定されました。



植田蛇胴製作所

◆ 石見神楽面（長浜面）

石見神楽では木彫面よりも「石見神楽面・長浜面」を用いることが多く、またそれが石見神楽の大きな特徴です。

1884年（明治17年）頃、国学者・藤井宗雄が長浜人形師に神楽面の製作を依頼したことが始まりと伝えられ、永見家「本地屋」と木島家「沢屋」の流れを汲む長浜人形師たちによって確立され、石見地域内外に広く伝播しました。

〈長浜面〉の製作技術は、浜田市長浜地区で中世期以降、生産・輸出していた伝統的産業の技術応用の真骨頂であり、木彫面に匹敵する緻密な造形表現と、石州和紙の軽量かつ強靱な造りが特徴で、その技術の集大成は石見神楽の蛇頭の製作にみることができ、この蛇頭と蛇胴を用いることで石見神楽の大蛇が成立しました。石見神楽にとって必要不可欠な神楽のものづくりであることはいうまでもありません。

また、石見神楽面である長浜面は、製作された地域の名前を冠しているばかりでなく、その唯一無二の製作工程や技術を含めて長浜面と称するものであり、この技術をもって製作された面は、どこの土地で製作されても石見神楽面であり、長浜面なのです。



柿田勝郎面工房

石見神楽面

◆ 石見神楽衣裳

金糸銀糸による立体的な伝説の生き物や動植物などの刺繍（ニクモチ）や、様々な意匠が所狭しに縫い込まれている刺繍仕立ての「石見神楽衣裳」は、細川衣裳店・細川勝三が情熱と研究と経験を積み重ねて開発しました。裸電球の下で陰影が浮かび上がるような立体的な造形は、歌舞伎衣裳や四国の太鼓台の布団締めめの修行のもとで確立された技術で生み出された独特の衣裳です。

全国に類を見ない豪華絢爛な「石見神楽衣裳」は、職人の手作業により縫い施され、完成まで数カ月を要し、島根県をはじめ中国地方の神楽や民俗芸能に非常に大きな影響力を持って伝播しました。



細川衣裳店



福屋神楽衣裳店



株式会社 佐渡村衣裳店



神楽ショップくわの木

◆ 石見神楽花火

石見神楽で使用される「石見神楽花火」は、飛び散る火花で延焼したり、床材を損傷したりしないように作られた特殊な花火であり、その燃焼吹き出し時間も石見神楽の舞を十分研究考慮され製作をされました。煙筒の留めには石州和紙を用いています。

1937年（昭和12年）開業の旭火薬銃砲店・旭英人が、1948年（昭和23年）、神楽研究家（衣裳製作者）・細川勝三の依頼により開発しました。1970年（昭和45年）に日本万国博覧会（大阪万博）で「石見神楽・大蛇退治」を演舞するにあたり、石見神楽長澤社中・石見神代神楽上府社中の意見をもとに改良され、口から煙火を噴く大蛇の姿は見る者を圧倒しました。

現在は演目「大蛇」のほか、鬼や賊などの登場時に、効果的な演出として用いられており、石見神楽にとって必要不可欠な石見神楽の伝統のものづくりのひとつとして、旭火薬

銃砲店・二代目旭洋二、三代目敬介により技術継承されています。



◆ 石見神楽笛

石見神楽笛は歌口と指孔の間に「窓（ラピューム）」がある横笛で、篠笛に較べて息の強弱による抑揚とリズム表現がつけやすいことが特徴です。

浜田市の神在坂（長沢町）に在住し、神社に奉職し笛の名手でもあった舟木春吉が昭和20年代後半に考案・開発しました。この〈石見神楽笛〉が、石見神楽八調子の奏楽と神社祭礼における夜明し舞の伝統を支えてきたといっても過言ではありません。

神楽笛は元来自作することが多く、現在は浜田市内外の舞手・技術保持者によって製作されていますが、竹の太さ・節の長さ・孔の大小と位置などで音階が変わる繊細な楽器であり、伝統を守りたいものづくり技術のひとつです。



◆ 石見神楽台本

幕末の国学者・藤井宗雄、神職・牛尾弘篤ほか神職神楽組「原井組」の神職らが、明治期に入り神楽舞を氏子に教授する過程で、神楽詞章改正と舞い振り・囃子の改良を行いました。このとき整えられた台本は「神楽の声」としてまとめられ、周辺地域の神楽伝承に大きな影響を与え手本とされました。

時代の変遷と伝播の過程で乱れた詞章を再整理する気運が高まったのは、1935年（昭和10年）頃のことです。

神楽研究家（衣裳製作者）・細川勝三、国語学者・石田春昭を中心として、戦前戦後の二回に分けて市内の教員や神職、石見神楽長浜社中等を交えた神楽研究が行われ、1954年（昭和29年）篠原実編『校定石見神楽台本』が上梓されました。復刻再版を繰り返し、いまや石見神楽のバイブルとして人々の手に渡っています。



校定石見神楽台本（初版）